

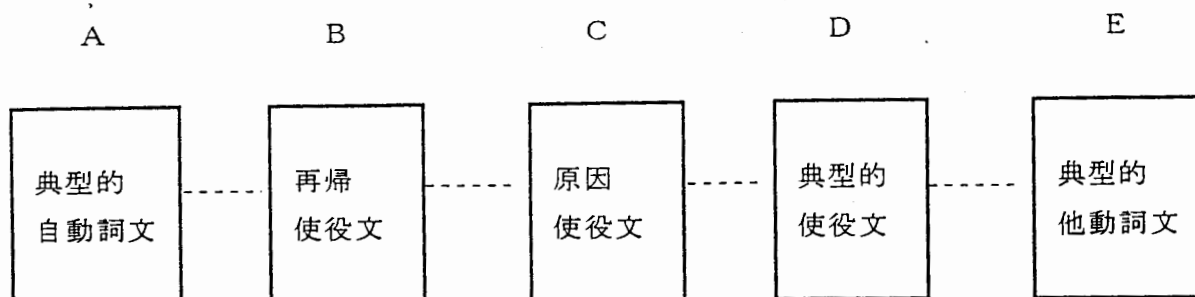
# 論文の和文要旨

論文題目	日中両語における使役表現の対照研究 —「させる」構文と「動補構文」を中心に—
氏名	ひょう ほう しゅ 馮 寶 珠

## 1. 本研究の研究成果

「彼は子供を学校に行かせる」「彼は娘に料理を作らせる」といった使役文は、使役者の意志性・使役性が強く感じられる表現である。しかし、「彼は息を切らせながら歩いた」「彼女は脚を閉じたまま、腰をよじらせた」といった使役文は、使役者の意志性・使役性があまり感じられない表現である。このように、使役文全体を使役性の強い典型的使役文から、使役性の薄い再帰使役文になっていく（全体としては連続体を成している）ものとしてとらえることを、原型文法（プロトタイプグラマー）と呼ぶ。プロトタイプを考え方を踏まえ、主語の“意志性”（使役者が意図的にその動作を引き起こすことを指す）の有無によって、日中両語における使役文の連続性を次のようにまとめた。

+ ←-----自動詞性の強弱-----> -  
 - ←-----他動詞性の強弱-----> +



B-1 “他眼睛閃著光的說道”（彼は目を輝かせて、そう言った）“他扭著腰走路”（彼は腰をねじらせながら歩いた）といった日中兩語の再帰使役文は、使役者（彼）と対象（目、足）との間に、「全体一部分」のような所有関係を持っており、通常使役者が経験者格として働き、意味的には再帰自動詞文“他眼睛閃著光”（彼は目が輝いた）・再帰他動詞文“他扭著腰”（彼は腰をねじった）に近い表現である。中国語の再帰使役文の例としては、主として①“板著臉孔”（顔をこわばらせる）などの動補動詞、②“臉色沈鬱”（顔を曇らせる）などの「主述連語」、③“板著臉說”（顔をこわばらせる）といった「動詞＋著＋賓語（＋動詞）」構文、④“飄了一眼”（視線を走らせる）といった「動詞＋數量賓語」構文（詳しくは、資料一覧を参照）などで言い表されることが多いようである。

B-2 「声をつまらせる・眼をパチパチ云わせる・眼をぱちぱちさせる・顔を晴れ晴れさせる・汗をしみこませる・胸を躍らせる・息をはずませる・顔をこわばらせる・背筋をこわばらせる・怖れを顔に漂わせる・頬をほてらせる・眼を血走らせる・顔を紅潮させる・眼を酔いに潤ませる・首筋に血をにじませる・歯をがちがち鳴らせる・胸に動悸を弾ませる・体臭をこびりつかせる・声をひきつらせる・唇をひびわれさせる・顔を青ざめさせる・目をくらませる・顔をくもらせる・腹をふくらませる」などのような「状態性動詞」からの再帰使役文は、文脈によっては使役者が意図的にその動作をすると解釈できないわけではない。しかし、どちらかと言えば使役者の非意志的な表現であると解釈されることが多いように思われる。

B-3 「鞭を鳴らせる・頭をのめらせる・頭を潜り込ませる・シーツを首に巻き付けさせる・足をばたばたさせる・背をのけぞらせる・足をもつらせる・手帳に鉛筆を走らせる・腰を浮かせる・体をくねらせる・活字に視線を泳がせる・目を走らせる・指をロープにからみつかせる・爪を手のひらに食い込ませる・身を躍らせる・両手を宙に泳がせる・

頭を砂の中にめり込ませる・掛け声を海の上に響かせる・髪を湯の中に泳がせる・金槌の音を響かせる・水を撥ねかせる・ポケットからハンカチをのぞかせる・足を急がせる・頭を椅子の背にもたせる・足をばたつかせる」などのような「行為性動詞」からの再帰使役文は、どちらかと言えば使役者の意志的な表現であると解釈されることが多いように思われる。

C-1 使役者が経験者格として働く原因使役文は、通常非意志性かつ被害や迷惑などのマイナス利益を持つ使役文である。例えば、「彼は火事で子供を死なせた」「彼はうっかり火事を起こして、子供を死なせた」などはそれである。しかし、「彼は保険金目当てでわざと火事を起こして、子供を死なせた」などは、意志性かつ恩恵などのプラス利益を持つ使役文になる。このように、「死ぬ」などの動詞の語彙的意味だけでは、意志性または利益性を持つ使役文であるかどうかは判断しにくく、その判断には文脈の支えが必要になると思われる。

C-2 日中両語の原因使役文においては、日本語では主として「苛立つ・困る・悩む・驚く・嘆く・喜ぶ・羨ましがる・恥じ入る・怯える・恐がる・おそれる・まごつく・迷う・泣く・笑う・面白がる・楽しむ・面食らう・感情を抱く・感じる・忘れる・信じる・考える・思い出す・疑う・思い起こす・安堵する・びっくりする・興奮する・満足する・安心する・失望する・狼狽する・戦慄する・いらいらする・うっとりする・ほっとする・落胆する・激昂する…」の思考認識動詞や感情動詞（詳しくは第4章の4.1.3を参照）などで言い表されることが多いようである。また、日本語の原因使役文（特に思考認識や感情動詞で言い表す原因使役文）は受身文に言い換えても、表現効果には違いがあるものの、述べられている事柄は同じであると思われる。つまり、原因使役文は、原因となるような事柄を主語（使役者）にたてて叙述する表現であると感じられるのに対して、それに対応する受身文は、その出来事の影響を受けた被動作者を主語にたてて叙述する表現であると感じられる、という表現効果の違いがある。

C-3 中国語の原因使役文では主として“驚動”（驚かす）“驚醒”（目を覚ます）“急壊”（焦らせる）“哭醒”（泣いて起こす）“哭濕”（泣いて濡らす）“擾亂決心”（決心を狂わせる）“喊啞”（叫んで噎らす）“罵哭”（叱って泣かせる）などのように、人間の心理状態を表す動補動詞（詳しくは資料一覧を参照）で言い表されることが多いようである。

D-1 「先生は生徒を帰らせる」などの典型的使役文は、通常意志性を持つ使役文である。使役者が基本的に動作主格として働く。なお、使役者の意図的な動作と、被使役者に結果または影響が及んだという点においては、「彼は椅子を壊す」といった典型的他動詞

文と共通している。

D-2 「～てもらおう」構文に言い換えられる日本語の使役文（例えば、「彼が大工に家を建てさせる」「彼が理容師に散髪させる」「彼が通行人に道を教えさせる」など）は、被使役者が目上ではない被使役者に依頼や動作を促す時に、「～てもらおう」構文に言い換えても表現効果には違いがあるものの、文は適格である。つまり、「させる」構文で言い表すと、強制的な意味合いがやや強く感じられるのに対して、「～てもらおう」構文で言い表すと、シ手の彼の利益性（恩恵などのプラス利益）のほかに、待遇性（謙譲または丁寧な気持ち）などの意味合いを持たせることができる表現である、という表現効果の違いが文中に現れてくる。しかし、目上の被使役者に依頼や動作を促す時には、語用論的な観点から見れば、「させる」構文を用いて表すと文が不適格となるのに対して、「～てもらおう」構文で言い表すほうがより適当な表現である場合が多いようである。

## 2. 日中両語における使役表現の共通点について

(1) 日中両語の使役文は、使役者が被使役者にある動作・作用をするように働きかけ、使役者の働きかけを受けた被使役者がその動作・作用を実行することを含意する表現である。例えば、中国語では「太郎嚇跑了花子」、日本語では「太郎は花子をおどして逃げさせた」などの用例が挙げられる。だが、使役者の働きかけを受けた被使役者がその動作・作用を実行しなければ、文は不適格となる。例えば、中国語では\*「太郎嚇跑了花子、但花子没嚇跑」、日本語では\*「太郎は花子をおどして逃げさせたが、花子は逃げなかった」などの用例がそれである。使役者の働きかけを受けた被使役者がその動作・作用を実行しなかったことを言い表したい場合は、中国語では“想／打算”（「太郎想嚇跑花子、但花子没嚇跑」など）を、日本語では「～ようとする」（「太郎は花子をおどして逃げさせようとしたが、花子は逃げなかった」など）を用いて表す。

(2) 日中両語の再帰使役文は、主節の述語動詞の示す動作・状態にとっての付帯的な動作・状態を表現するものが多いようである。例えば、中国語では「她搖頭晃腦的踉踉跄跄地走了」、日本語では「頭をふらふらさせながら、よろけ出て行った」といった再帰使役文は、「彼女は頭をふらふらさせた」事態と「彼女は一人でよろけ出て行った」事態が同時に起こっていることが言い表される。つまり、「彼女は頭をふらふらさせた状態で、一人でよろけ出て行った。」または「彼女は一人でよろけ出て行った。頭をふらふらさせた状態で。」とも表されうる事態である。「頭をふらふらさせる」ことは、「一人でよろけ

出て行く」ことと切り離してなされた行為ではなく、「彼女は一人でよろけ出て行く」時にそれに伴って生じた「頭」の状態であり、「頭をふらふらさせながら」という表現は「よろけ出て行く」時の彼女の表情を表す表現であると言えるだろう。

### 3. 日中両語における使役表現の相違点について

(1) 時間副詞句を用いて表す日中両語の使役文は、次のように異なる。例えば、中国語の「太郎嚇跑了花子兩個小時」、日本語の「太郎は花子を二時間おどして逃げさせた」といった使役文の場合、中国語では「花子が逃げるように太郎は二時間おどした」としか解釈できないのに対して、日本語では「花子が逃げるように太郎は二時間おどした」と解釈されるのが普通であるが、「花子が二時間逃げるように太郎はおどした」と解釈することも可能である。

(2) 中国語の「太郎嚇跑了花子兩次」、日本語の「太郎は花子を二回おどして逃げさせた」といった回数副詞を用いる使役文は、次のように異なる。中国語では「花子が逃げるように太郎は二回おどした」の意味合いしか持たないのに対して、日本語では「花子が逃げるように太郎は二回おどした」の意味合いのほかに、「太郎はおどして花子を逃げさせることを二回した」の意味合いをも持っている。つまり、「二回」などの回数副詞が使役文に現れると、中国語では使役者（太郎）の動作について言うことになるが、日本語では使役者（太郎）または被使役者（花子）の双方の動作について言うことになる。

(3) 日中両語の使役文は、「一生懸命」などの状態副詞が文中に現れると、次のようになる。例えば、中国語では「太郎拼命地嚇跑了花子」、日本語では「太郎は花子を一生懸命おどして逃げさせた」といった使役文の場合は、日本語では「太郎は花子をおどして一生懸命逃げさせた」と解釈されるのが普通であるが、「花子が一生懸命逃げるように太郎はおどした」と解釈することも可能である。それに対して、中国語では「花子が逃げるように太郎は一生懸命おどした」としか解釈できない。つまり、「一生懸命」などの状態副詞が使役文に現れる場合は、日本語では使役者（太郎）の動作を修飾することもできるし、被使役者（花子）の動作を修飾することもできる。一方、中国語では使役者（太郎）の動作を修飾することはできるが、被使役者（花子）の動作を修飾することはできない。

(4) 日本語の使役文では、使役者が三人称で、被使役者が一人称または二人称の場合、文が不適格になることがある。例えば、「?彼は僕を行かせる」や「?彼はあなたを行かせ

る」などの用例が挙げられる。しかし、過去（例えば、「彼は僕を行かせた」や「彼はあなたを行かせた」など）や「間接話法」（例えば、「彼は僕に行くように言った／言っている」や「彼はあなたに行くように言った／言っている」など）を用いて表すと、その人称制限が解消される。それに対して、「他嚇壞了我」（彼は私をびっくりさせた）と「他嚇壞了你」（彼は君をびっくりさせた）といった中国語の使役表現には、日本語のような人称制限が見られない。従って、“完成態”（日本語の「～した」に相当する）になってもならなくても、文は適格である。例えば、「他嚇壞我了」（彼は私をびっくりさせる）と「他嚇壞你了」（彼は君をびっくりさせる）などの用例がそれである。

（5）再帰使役文において、日本語では「させる」構文のほかに、他動詞文や自動詞文などで言い表されるのに対して、中国語では主として「動補構文」で言い表される。

筆者自身が日本語を学んだ際にも、日本語を教える立場になった後も、「目を光らせる」のような再帰使役文の問題に悩まされた。しかし、本研究で日中両語の対照研究に取り組むことによって、中国語話者の立場から日本語の「させる」構文、特に「目を光らせる」のような再帰使役文についての理解を深めることができた。今後はこの研究成果を踏まえて、中国語を母語とする日本語学習者の立場に立った教科書や文法書作りに携わり、日本語教育に役立つような指導書や教授方法開発の一助にしたいと考えている。